

集合論

M. Nakata

目次

定義

2つの集合 X と Y は, X から Y への全単射が存在するとき **対等** (*equivalent*) であるといい, $X \cong Y$ と表す. この \cong は集合間の同値関係になる (ただし, 「集合全体の集合」は存在しない. すべての集合を集めたものは **類** (*class*) とよばれる. 類においても集合と同じように同値関係を考えればよい). 集合 X の同値類を $\text{card}(X)$ と書き, X の **濃度** (*cardinality, cardinal*) という. n 個の元からなる有限集合 $\{1, 2, \dots, n\}$ の濃度を n で表す. さらに, \aleph_0 で \mathbf{N} の濃度を, \mathfrak{c} で \mathbf{R} の濃度を表し, \mathfrak{c} を **連続体濃度** (*cardinality of the continuum*) という. 濃度が \aleph_0 であるような集合は **可算集合** (*countable set*) とよばれる. 集合が有限集合か可算集合のいずれかであることを **高々可算** (*at most countable*) であるという. $\text{card}(X) = m$, $\text{card}(Y) = n$ であるような集合 X, Y に対して, Y^X の濃度を n^m で表す. $\{X_\lambda : \lambda \in \Lambda\}$ を互いに素な集合族とするとき, 濃度の和と積をそれぞれ

$$\begin{aligned}\sum_{\lambda \in \Lambda} \text{card}(X_\lambda) &= \text{card}\left(\coprod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda\right), \\ \prod_{\lambda \in \Lambda} \text{card}(X_\lambda) &= \text{card}\left(\prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda\right)\end{aligned}$$

と定義する. \square

以下では, 系と Bernstein の定理は一々断らない.

補題

濃度の和、積および冪乗は well-defined である。すなわち、 $\{X_\lambda : \lambda \in \Lambda\}, \{Y_\lambda : \lambda \in \Lambda\}$ をともに互いに素な集合族であって、各 $\lambda \in \Lambda$ に対して $\text{card}(X_\lambda) = \text{card}(Y_\lambda)$ なるものとする、

$$\begin{aligned}\text{card}(\coprod X_\lambda) &= \text{card}(\coprod Y_\lambda), \\ \text{card}(\prod X_\lambda) &= \text{card}(\prod Y_\lambda), \\ \text{card}(X_1^{X_2}) &= \text{card}(Y_1^{Y_2}). \quad \square\end{aligned}$$

証明

仮定より、全単射の族 $\{f_\lambda : X_\lambda \rightarrow Y_\lambda : \lambda \in \Lambda\}$ が存在する。このとき

$$\begin{aligned}\coprod f_\lambda(x) &= f_\mu(x) \quad (\text{if } x \in X_\mu), \\ (\prod f_\lambda(x))_\mu &= f_\mu(x_\mu)\end{aligned}$$

によって写像 $\coprod f_\lambda : \coprod X_\lambda \rightarrow \coprod Y_\lambda$, $\prod f_\lambda : \prod X_\lambda \rightarrow \prod Y_\lambda$ を定義すれば、これらは全単射である。まず $\coprod f_\lambda$ が全単射であることを示す。任意の $y \in Y_\mu$ に対して $\coprod f_\lambda(f_\mu^{-1}(y)) = y$ だから全射である。 $\coprod f_\lambda(x) = \coprod f_\lambda(x')$ とすれば $x, x' \in X_\mu$ であるような μ が存在して、 $f_\mu(x) = f_\mu(x')$ 。よって f_μ の単射性より $x = x'$ 。次に $\prod f_\lambda$ が全単射であることを示す。 $\prod f_\lambda(x) = \prod f_\lambda(x')$ とすれば任意の μ に対して $f_\mu(x_\mu) = f_\mu(x'_\mu)$ であるから、 f_μ が単射であることから $x_\mu = x'_\mu$ 。 μ は任意だから $x = x'$ が従う。一方、任意の $y \in \prod Y_\lambda$ に対して、 $x_\lambda = f_\lambda^{-1}(y_\lambda)$ によって $x \in \prod X_\lambda$ を定義すれば $\prod f_\lambda(x) = y$ 。よって $\prod f_\lambda$ は単射でもある。以上より、 $\coprod f_\lambda$ と $\prod f_\lambda$ は全単射であるから、

$$\begin{aligned}\text{card}(\coprod X_\lambda) &= \text{card}(\coprod Y_\lambda), \\ \text{card}(\prod X_\lambda) &= \text{card}(\prod Y_\lambda).\end{aligned}$$

最後に、 $f : X_2 \rightarrow X_1$ に $\hat{f} = f_1 f f_2^{-1}$ を対応させれば、これが $X_1^{X_2}$ から $Y_1^{Y_2}$ への全単射となる。実際、 $\hat{f} = \hat{g}$ ならば $f_1 f f_2^{-1} = f_1 g f_2^{-1}$ であるから、 $f = g$ となる。また、 $h : Y_2 \rightarrow Y_1$ に対して $f = f_1^{-1} h f_2$ とおけば $\hat{f} = h$ となる。よって写像 $f \mapsto \hat{f}$ は全単射であり、

$$\text{card}(X_1^{X_2}) = \text{card}(Y_1^{Y_2})$$

が言える。 \square

補題

集合 X と Y が与えられたとし, $m = \text{card}(X)$, $n = \text{card}(Y)$ とおく. 単射 $: X \rightarrow Y$ が存在するとき $m \leq n$ とすると, これは濃度の順序関係を定める. また, $m \leq n$ であるための必要十分条件は全射 $: Y \rightarrow X$ が存在することである. \square

証明

$m \leq n$ の必要十分条件が全射 $: Y \rightarrow X$ の存在であることはよい. \leq が順序関係であることを確かめる. まず, 全単射 $1_X : X \rightarrow X$ が存在するから $m \leq m$ である. $m \leq n$ かつ $n \leq m$ のとき単射 $: X \rightarrow Y$ および $: Y \rightarrow X$ が存在するから, 全単射 $: X \rightarrow Y$ が存在する. 従って $m = n$. 最後に, X, Y, Z は集合で $m = \text{card}(X)$, $n = \text{card}(Y)$, $l = \text{card}(Z)$ とおき, $m \leq n$ かつ $n \leq l$ とする. このとき 2 つの単射 $f : X \rightarrow Y$ および $g : Y \rightarrow Z$ が存在する. $gf : X \rightarrow Z$ は単射である. 実際, $gf(x) = gf(x')$ ならば $f(x) = f(x')$, 従って $x = x'$. よって X から Z への単射が存在するから $m \leq l$. 以上で \leq が順序関係であることを示せた. \square

命題

$a, b \in \mathbf{R}$, $a < b$ とする.

$$\text{card}(\mathbf{Z}) = \text{card}(\mathbf{Q}) = \aleph_0, \quad (1)$$

$$\text{card}([a, b]) = \text{card}((a, b)) = c, \quad (2)$$

$$2^{\aleph_0} = c, \quad (3)$$

$$2 \leq n \implies m < n^m. \quad (4)$$

ここで, $[a, b] = \{x \in \mathbf{R} : a \leq x \leq b\}$ を閉区間 (*closed interval*) といい, $(a, b) = \{x \in \mathbf{R} : a < x < b\}$ を开区間 (*open interval*) という.

ここから特に, $\aleph_0 < c$ が分かる.

証明

(1) の証明

$n \in \mathbf{N}$ に対して, $\phi(2n-1) = -n$, $\phi(2n) = n-1$ とすれば, $\phi: \mathbf{N} \rightarrow \mathbf{Z}$ は全単射となる. よって $\text{card}(\mathbf{Z}) = \aleph_0$. \mathbf{N} から \mathbf{Q} への全単射を式で表すのは難しい. 有理数列 $\{a_n\}$ を次の数列とする:

$$0, 1, \frac{1}{2}, \frac{1}{3}, \frac{2}{3}, \frac{3}{4}, \frac{1}{4}, \frac{2}{5}, \frac{3}{5}, \frac{4}{5}, \frac{5}{6}, \frac{1}{6}, \frac{2}{7}, \dots$$

具体的には以下の手順で求める:

1. n/m ($m, n \in \mathbf{N}$, $1 \leq n \leq m$) の形の有理数を, $1/(2q-1), \dots, (2q-1)/(2q-1), 2q/2q, \dots, 1/2q$ の順番で並べる.
2. 並べた有理数を順番に見ていき, 約分した結果すでに現れた有理数と等しくなるものは除外する.
3. 残った有理数を順番に番号付ける.

こうして $\{a_n\}$ を得る. この構成から分かるように, $\mathbf{Q}' = \{x \in \mathbf{Q} : 0 \leq x \leq 1\}$ とおくと, 写像 $n \mapsto a_n$ は \mathbf{N} から \mathbf{Q}' への全単射になる. あとは \mathbf{Q}' と \mathbf{Q} が対等であることを示せばよい. \mathbf{Q}' は \mathbf{Q} の部分集合である \mathbf{Q}' 自身と対等であるのは明らかだから, \mathbf{Q} から $\mathbf{Q}'' = \{x \in \mathbf{Q} : 0 < x < 1\} \subset \mathbf{Q}'$ への全単射の存在を言う. $x \in \mathbf{Q}''$ に対して,

$$\psi(x) = \begin{cases} \frac{x-1/2}{x} = 1 - \frac{1}{2x} & (\text{if } x \leq \frac{1}{2}), \\ \frac{x-1/2}{1-x} = -1 + \frac{1}{2(1-x)} & (\text{if } x > \frac{1}{2}) \end{cases}$$

とすると, $\psi: \mathbf{Q}'' \rightarrow \mathbf{Q}$ は全単射である. 実際, $x < x' < 1/2 < y < y'$ のとき $\psi(x) < \psi(x') < \psi(1/2) = 0 < \psi(y) < \psi(y')$ だから, ψ は単射. また, 任意に $z \in \mathbf{Q}$ を取ると, $z > 0$ ならば

$$\frac{1}{2} < \frac{2z+1}{2(z+1)} < 1, \quad \psi\left(\frac{2z+1}{2(z+1)}\right) = z$$

となり, $z < 0$ ならば

$$0 < \frac{1}{2(1-z)} < \frac{1}{2}, \quad \psi\left(\frac{1}{2(1-z)}\right) = z$$

となるから, ψ は全射でもある. よって \mathbf{Q}'' と \mathbf{Q} は対等であり, 従って $\text{card}(\mathbf{Q}) = \text{card}(\mathbf{Q}') = \aleph_0$.

(2) の証明

まず $\text{card}((a, b)) = c$ は,

$$f(x) = \tan\left(\frac{\pi}{2} \cdot \frac{2x - (a+b)}{b-a}\right)$$

によって定まる写像 $f: (a, b) \rightarrow \mathbf{R}$ が全単射であることから分かる. 次に $\text{card}([a, b]) = c$ を考える. \mathbf{R} と $(a, b) \subset [a, b]$ が対等であることは示した. 当然 $[a, b]$ は $[a, b] \subset \mathbf{R}$ と対等だから, 結局 $[a, b]$ と \mathbf{R} は対等で, $\text{card}([a, b]) = c$.

(3) の証明

$2^{\mathbf{N}}$ から開区間 $(0, 1)$ への単射と全射をそれぞれ構成する. 以下, 簡単のため $2 = \{0, 1\}$ と書く. 写像 $f: \mathbf{N} \rightarrow 2$ に対して

$$\begin{aligned} B_f^{(n)} &= \sum_{k=1}^n \frac{f_k}{2^k}, & B_f &= \sum_{k=1}^{\infty} \frac{f_k}{2^k}, \\ T_f^{(n)} &= \sum_{k=1}^n \frac{f_k}{3^k}, & T_f &= \sum_{k=1}^{\infty} \frac{f_k}{3^k}, \end{aligned}$$

とおき,

$$\begin{aligned} \beta(f) &= \begin{cases} B_f & (\text{if } B_f \in (0, 1)), \\ \frac{1}{2} & (\text{if } B_f \notin (0, 1)), \end{cases} \\ \tau(f) &= \begin{cases} T_f & (\text{if } T_f \in (0, 1)), \\ \frac{2}{3} & (\text{if } T_f \notin (0, 1)), \end{cases} \end{aligned}$$

と定義する (B は binary, T は ternary の頭文字). このとき, $\beta: 2^{\mathbf{N}} \rightarrow (0, 1)$ は全射で $\tau: 2^{\mathbf{N}} \rightarrow (0, 1)$ は単射であることを示す.

任意の実数 $r \in (0, 1)$ は 2 進少数展開 $r = \sum r_k 2^{-k}$ を持つ. そこで写像 $R: n \mapsto r_n$ を考えれば, $\beta(R) = B_R = r$. よって β は全射. 次に, $f, g: \mathbf{N} \rightarrow 2$ であって, $f \neq g$, $\tau(f) = \tau(g)$ なるものが存在したとする. もし $\tau(f) = \tau(g) = 2/3$ ならば, $T_f = T_g = 0$ より $f = g = 0$ が従うから, $\tau(f) = \tau(g) \neq 2/3$ ($0 \leq T_f \leq 1/2$ に注意). このとき $T_f = T_g$. $f \neq g$ であるから, $f_n \neq g_n$ となる $n \in \mathbf{N}$ が存在する. そのような n のうち最小のものを m とすると,

$$T_f^{(n)} = T_g^{(n)} \quad (n < m), \quad T_f^{(m)} \neq T_g^{(m)}.$$

そこで, $f_m = 1 > 0 = g_m$ としてもよく, そのとき $T_f^{(m)} > T_g^{(m)}$ が成立つ. さて, 新しい写像 $f', g': \mathbf{N} \rightarrow 2$ を,

$$\begin{aligned} f'_n &= f_n \quad (n \leq m), & f'_n &= 0 \quad (n > m), \\ g'_n &= g_n \quad (n \leq m), & g'_n &= 1 \quad (n > m) \end{aligned}$$

と定義する. すると, 簡単な計算より,

$$\begin{aligned} T_{f'} &= T_f^{(m-1)} + \frac{1}{3^m}, \\ T_{g'} &= T_g^{(m-1)} + \frac{1}{2 \cdot 3^m}, \end{aligned}$$

が分かる．ここから $T_g \leq T_{g'} < T_{f'} \leq T_f$ となるから， $T_f \neq T_g$ ．従って τ の単射性が示された．

以上より $2^{\aleph_0} = \text{card}((0,1)) = \mathfrak{c}$ となる．

(4) の証明

この証明は **Cantor** の対角線論法 (*Cantor's diagonal argument*) とよばれる． X, Y を集合として， $m = \text{card}(X)$ ， $n = \text{card}(Y)$ とおく． $n \geq 2$ とする．単射 $: X \rightarrow Y^X$ の存在はすぐに分かる．たとえば Y の異なる 2 元 $a, b \in Y$ を選び ($n \geq 2$ だから選ぶことができる)， $x \in X$ に対して $\chi_x(x) = a$ ， $y \neq x$ のとき $\chi_x(y) = b$ とすれば，写像 $x \mapsto \chi_x$ が単射である．全射 $: X \rightarrow Y^X$ が存在しないことを示すために， $f: X \rightarrow Y^X$ を全射とする．

ここで，写像 $g: X \rightarrow Y$ を， $f(x)(x) = a$ のとき $g(x) = b$ ， $f(x)(x) \neq a$ のとき $g(x) = a$ と定義すれば $g \notin f(X)$ である．実際各 $x \in X$ に対して $g(x) \neq f(x)(x)$ となり， $g = f(y)$ なる $y \in X$ は存在しない．これは f が全射でないことを意味するから矛盾．よって X から Y^X への全射は存在せず，従って $m < n^m$ ．□